伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長　本田　研一

もう三十年は過ぎようとしている、初めての海外公演。それは、ちょうど二月でした。

高森風鎮太鼓保存会が、町役場青年職員が中心となり継承されていたこの太鼓を引き継ぎ、まだ形ができていない頃、海外公演の話をもっていきました。

場所は台湾台北市の野外音楽堂。決定事項を先に伝え、不安よぎるなかでの参加要請を行いました。まだはじめて間もない頃、しかし実績と海外公演が今後生きてくるのだと強くお願いしました。快諾を得ました。

この催しの参加団体は二団体、もう一団体は天草本渡市の太鼓団体でした。まだ三十代の現天草市長の安田氏が、メンバーに加わっていました。

この太鼓公演を実現させるために、約三年の時間を費やしました。本町商工会の女子職員を同行しての、宣伝活動をやりました。台湾政府の高官訪問時に、台北市立公園野外音楽堂での公演が決定しました。

話をもっていき、開催まで三ヶ月位の時間しかなく、大急ぎで準備にかかりました。太鼓練習場所は当時の母子福祉センターでした。夜の七時過ぎからの練習も、公演開催日が近づくと毎日となりました。主催する私達も、海外公演等を手がけるのは初めてであり、近づくにつれ不安が増してきました。

▲台北市にて

当時阿蘇青年会議所で活動していた私は、この事業を会議所主催とし、その後多くの団体の海外公演を企画しました。台北での開催後、台中・台南・高雄・上海・南京・北京・ソウル等でのこの事業を展開してきました。

この経験が、高森風鎮太鼓保存会の、アメリカモンタナ州での公演成功の一因となった事でしょう。

ほとんどのメンバーが、台湾訪問は初めてでした。日本は一番寒い二月、それでも肌寒いくらいの天候で、陽が差せば半そでシャツで過ごせる、そんなおだやかな気候でした。

三泊四日で訪問した私達は、中日に公演予定を入れていました。観光など公演が終わるまでは落ち着かない、皆そんな様子でした。初日の夕食会は、静かに終わりました。

公演当日を迎えました。落ち着かなく開場三時間前には、台北野外音楽堂へ行きました。

収容人数一千人規模、ギリシャ式神殿を思わせるその造りに接した時、メンバーはむしろ落ち着きを取り戻し準備に入りました。

どれくらいの来場者で開催できるのか、台北市側にお願いしただけで、それは不安でした。開演一時間前には満席になりました。それは驚きでした。現地の外務省関係者、そして友人が全島のマスコミを活用し、開催を告知してくれました。

リズミカルな天草本渡の太鼓と、落ち着いた太鼓さばきの高森風鎮太鼓。その違いが双方に喝采を、贈りました。公演が終わると舞台に観客が駆け上り、奏者にサインをねだりあまりの多さに悲鳴をあげる。その姿今でも忘れることは出来ません。

台湾中部、ここから四時間はかかるでしょう、少数民族出身の女性が尋ねてきました。子供の頃に聞いた日本の太鼓が見たくやってきました。「ありがとう」忘れえぬ一言です。

太鼓は、国を越えて互いに感動をもたらしました。